

# 中国における冥婚

敖特根苏布徳

## 一 はじめに

冥婚<sup>1)</sup>について知ることができたのは、2004年から内モンゴルオールドス地域で調査をしていた時であった。モンゴル人のドルジさんの家に住み込みで働いていた漢人の李さんから聞いた話と、最近内モンゴルで起きている何人かのモンゴル人女性の墓が盗まれる事件があった。

2006年、冥婚目的で起きた殺人事件があり、いまだに冥婚が存在することが明らかになった。

## 二 冥 婚

### 1. 冥婚の研究

冥婚は英語で ghost marriage で、日本で「幽霊結婚」あるいは「亡霊婚」と訳されている。(和田 1979: 34) 桜井徳太郎が、冥婚のフィールドを、日本の東北地方、沖縄、そして朝鮮半島の南部の3地域にしたということから、冥婚は以上の地域に存在した可能性が高い。台湾における冥婚は Wolf, Jordon により紹介され、シンガポール広東系華人社会においての同様な習慣が Topley によって報告されている。(中田 1979: 3) 冥婚は漢人社会に存在していたのは確かである。しかし、夭折した女子が嫁入りしたり、死者と死者とを婚姻させたりするのは、中国の特集な社会制度に関係しているようである。(和田 1979: 35)

### 2. 中国における冥婚

中国における冥婚習俗の地理的な分布は、河北、山西、山東、河南をはじめ陝西省から浙江の華南地域に広がり、時間的には約2000年以前に遡及することができる。(中田 1979: 13) しかし、冥婚の詳しい報告は、1940年以降ほとんど行われてない。共産党政権下であって、冥婚結婚は迷信活動とされ、実施が控えられたためである。改革開放政策が採られて以降、近年精神面でも引き締めが少しずつ緩められ、柔軟な対

応が採られるようになったため、種々の信仰活動が復活して行われるようになり、近年は冥婚も盛大に執り行われるようになった。死霊婚は、約半世紀にもわたる中断によって消滅することがなかった。(廣田 1999: 24)

陝西省は漢人の文化の発祥地でもある。ウーシン旗と接している。李さんは陝西省から内モンゴルに移住してきた漢人である。李さんは冥婚を「娶骨屍」と呼んでいた。彼は、お金はかかるがそれは、子供の気持ち次第だという。しかし、どうしても女の死体が見つからなければ、銀で人の形を作って遺骨と一緒に埋めてもよいと言う。

### 3. 冥婚の動機

冥婚習俗とは、未婚の死者同士または死者と生者の婚姻儀礼である。冥婚習俗では、未婚で死亡した男女の遺骨の合葬が行われる(廣田 1992: 107-109)。冥婚の動機は、先祖の墓に入れられ、祭られる権利を、未婚未成年で死んだ者に得させるためである。女は結婚しないと一人前になれないという考え方が昔からあったが、時代がおってその考え方が強くなり、孝道徳や家観念の発達も加わって、明・清代及び近時には未婚の女性を実家の祖先の墓にも祖廟にも祭らないという事態が出現し、冥婚の要求は強まってきた。だから、許婚関係にある女子が出嫁せずに死んだ場合には、冥婚という手続きによって、相手の家の墓に入れる。また許婚関係に入る前に死んだ女子なら冥婚によって既婚者にして、祭られる権利を得させようとする傾向が顕著になってきた。(廣田 1992: 112) 未婚で死亡した男性の場合…近時の慣用調査報告では、祖墳に夫婦揃って葬られるのを原則としているのである。(廣田 1992: 113)

冥婚習俗の送葬儀礼は、未婚合葬の形を整えて、人間の完成した姿を人為的に作り出すことだといえる。それは、本来祖墳に入る資格のない未成年未婚死者に祖墳に入る資格を与えることになるのである。(廣田 1992: 113)

#### 4. 冥婚目的での殺人事件

中国で起きた殺人事件が、中国の農村社会の一部にいまだに冥婚が存在しているということを明らかにした。冥婚は主に陝西省と山西省で行われているという。

山西省のチ県という町は非常に貧しい町で、お葬式屋は異常であるほど多い。彼らは、正常のお葬式に使われるものを売る以外、他方冥婚の相手を紹介する商売をして金儲けをするという。この数年、山西省では鉱山を掘る事故が頻繁に発生し、死亡する男性が多数あられ、女性の死体が足りなくなっている。そのため、山西省の冥婚を予定している家族は女性の死体の身元を確認しないまま、合葬するという。こうした状況は、殺人事件を起こることを手伝ったことになったともいえる。

2006年10月に、殺害された女の子は陝西省の西呉鎮の人で知的な障害を持っていた。彼女は、殺害され3万5千円で売られて、妻に毒を飲まされ死亡した男性の遺体と一緒に埋められた。(インターネット・ホームページ:HP,「山西冥婚殺人事件」)

ある警察が、記者のインタビューで次のように話した。「冥婚は長年の習俗慣用なので、変えるのがなかなか難しいのである。しかし、もし冥婚を行うならば、死体の身元をきちんと確認するように呼びかけている」ということは、警察側は、冥婚を禁止してないということになる。(HP,「山西冥婚殺人事件」)

### 三 冥婚がもたらしたオルドス地域への衝撃

#### 1. オルドスの地理的位置

オルドスは内モンゴル自治区の西南部に位置し、北を除いた東西南は漢人居住地域によって囲まれている。地理に、漢人から近いという理由から、オルドス地域にはおよそ100年前から漢人の入植が始まっている。筆者が調査を行った地域は、まさにオルドスの西南部の最前端にあたるウーシン旗である。清朝までさかのぼると、ウーシン旗の面積は現在のよりはるかに広く、南は長城までであった。長城が漢人と蒙古人の境界線であり、以南は漢人居住地で、長城以降はモンゴル人の住む場所だとはっきり分かれていた。長年の経過につれ、長城以降の一部分の土地は、南の陝西省の領域になり、ウーシン旗の面積が減った。そして、接しているウーシン旗に入植のため陝西省から大量の漢人が入りこんだ。

現在、ウーシン旗が遊牧地域と言われているが、遊

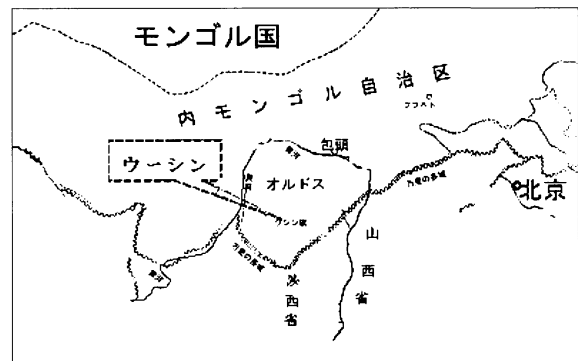


図1 オルドスのウーシン旗の位置  
筆者によるウーシン旗のイメージ図

牧民を含むモンゴル人人口はわずか3万人で、漢人は7万人に達している。移住してきた漢人らは、子供を生み家族を拡大し、ウーシン旗で生活をしてきたが、死んだら遺骨を出身地の陝西省に持って行くのが普通であった。しかし、1980年代以降、ウーシン旗に住む漢人中、遺体を故郷に持っていかず、故郷から祖先の墓地をまるごとモンゴルへ移す者が現れている。(楊2003:295)

#### 2. 冥婚を希望する李

李は、1956年に陝西省から出稼ぎで兄と二人でオルドスのウーシン旗に来た。現在にいたるまでウーシン旗に住んでいる。文化大革命の時、貧乏人であったため、モンゴル人の知識人であったドルジのように、身体的や精神的な被害を受けることはなかった。1983年に、行った家畜請負制に間に合って、土地の原住民と同じく広さの土地と同じ数の家畜が与えられた。

李は、ウーシン旗に来てから現在に渡るまで、40年以上内モンゴルに住んでいるが、死んだらやはり遺体を故郷の陝西省まで運んでもらい先祖代々の共同墓地に入れると話していた。そして、死んだら、甥がおそらく冥婚をおこなってくれると話していた。

現在、甥の家から30キロ離れたドルジのところに住んで、ドルジの家に住み込みで働いている。李は、独身で、現在まで結婚しなかったため、子供がいなく、兄貴の子供を養子にもらった。ドルジの家に働きに来る前、甥の家族と一緒に住んでいた。李は、甥が結婚させるとき大量なお金を払ったという。

#### 3. モンゴル地域に与えた大きな衝撃

冥婚という漢人の特異な習俗は、陝西省と隣接しているウーシン旗のモンゴル人に大きな衝撃を与えた。1990年ころから、モンゴル人女性の墓が掘り出され

遺体が盗まれた事件が起きた。2006年に、ウーシン旗の東部に、二件が起きている。80歳の女性と36歳の女性である。

モンゴル人は故人の遺体に触れることは非常に乱暴で許しがたいと見ている。遺体を盗んで商売に使う漢人の不道徳な行為に対して、強い怒りを感じる。モンゴル人の埋蔵方法は、火葬と土葬の両方である。死亡した原因になる病気によって、埋蔵の仕方も異なる。しかし、土葬のほうが多いではないかという人がいた。土葬があるから、次の盗まれる事件が起きたのである。埋蔵される場所も住んでいる地域から遠く、一日中一年中見張ることが不可能である。その点で、盗みやすいものがある。

タナさん（モンゴル人女性 22歳）は恐怖を感じるという。人間はいずれ死ぬが、漢人に盗まれるのが怖い。火葬にしてほしい。子供のころ、漢人のお葬式を見たことがある。今考えてもぞっとする。思い出したくない。私は文明の社会に生きたい。

バトさん（モンゴル人男性 56歳）は、こちらはおもともとモンゴル人住む地域だった。漢人が入ってきて人口が増えて住民が大変困っている。何より漢人らは、お墓をオボアのすぐ近くに建てる。オボアはモンゴル人にとって、聖地である。そのようなところで、墓地を建てるということは許せない。しかし、上告しても政府はどうもしてくれない。近年、モンゴル人の何人の青年が死んだ。古い師に、占ってももらったら、また人は死ぬのだという。理由は、オボアに漢人の墓が建てられ、汚くなったためオボアの神様怒っているという。

トヤさん（モンゴル人女性 53歳）

オボアに行く時に、子供が漢人の墓が怖がって、オボアに一人で行けない。その墓地がオボアに行く道のすぐ隣にある。私も、迷い羊を追ってたまに通るが、気味悪い。

#### 四 おわりに

冥婚は実際存在しないと思う人が多かったようである。急速に発展を遂げている中国に、いまだに古い習俗が機能しているということは信じがたい話でもある。さらに、冥婚目的での殺人や死体売買が人々に大きな衝撃を与えている。特に、オールドス地域における習慣が漢人と異なる人々にとって、自分の家族の墓が

掘られ、商売に使われるということは非常に屈辱的である。

死体売買はいわばビッグビジネスになっている。陝西省と山西省が圧倒的に多い。山西省のチ県は、お葬式関係の店が立ち並んで、死体商売に関与しているといわれている。彼らは、冥婚相手の紹介を行ういわば死体ブローカーでもある。死体が足りない場合、外地に出て死体狩りをするという。死体の値段は、地域、個々のケースにもよるが死亡時間が長く経ってない、年齢が若ければ値段が高い。2007年3月のある記者の報告によると、山西省では、四年前何千円だった死亡したばかりの死体が現在3万元から4万元になって、古い死体は300百元から500元になっているという。（Asia: Wet goods or dry goods; China's Corpse brides）

死体売買は非論理的である。法で禁止されるのは当然の成り行きではないかと思われる。しかしながら、2000年以上の歴史を持つ古い習俗が簡単になくならないという人もいる。

冥婚は死者のために行われる習俗でありながら、実際生者に影響を与えている。冥婚が行われるため、女性の死体を商品にし、ブローカーによって売りさばかれる。利益のため、死体目的で、殺人事件も発せしている。

モンゴル人は、これに対してひどく嫌っている。自分の身内の墓が盗まれた事件に対して、怒りと無能を感じる。モンゴル人は、死後の「住む」場所を生きている間に、子孫に伝えておく。自分の好きな場所を選んで、そこに埋めてくれと頼む。勿論モンゴル人と言っても、地域差があるので、ウーシン旗の東部においては多く見られるケースである。死後の居住地としては、生きている家族と一段距離を置くのが原則である。好きな場所とは、自分の家畜の歩き回る牧野だったりする場合が多い。

墓も、石で永久的なものを作ることを理想としてない。漢族のように、5代からなる共同墓、いわば祖墳を持っていない。土で集められた地味な小さな丘のようなものである。埋蔵した場所は、埋蔵したから二、三年立つにつれ、風や雨により地面と同じような高さになり、埋蔵した場所が家族以外の人にはわからなくなる。年に一回正式にお墓参りをするが、必ずしも墓の穴までに行く必要はなく、近くに行って参りをするのが大事である。地理的な遠い距離から、モンゴル人がお墓を守りきれないという状況に落ち、泥棒にあったのである。

モンゴル人の墓参りは、スピリチュアルであると言える。墓のつくりから、場所をとらない、自然を破壊しないという思想がうかがえる。モンゴル人には、死んだ人を静かに見送る習慣がある。それは、大きなお墓を建て、大げさに行う漢人のお葬式と正反対である。

モンゴル人にとっては、死体は商品ではない。「死者」は自分の羊が歩き回る土地で、遠くから家族を眺めながら、時間が経つにつれ、生まれた大地に再び還元することを望んでいる。いわゆる木になり、草になり、羊に食べさせられることを期待している。だから、死ぬ前から「ここに住みたい」と埋蔵する場所を決め、家族に伝えておく人が多い。こうした、死者が希望した場所から、無理やりに場所移すことは死者の意思にそむく。

残りの家族にとって、埋めてあるのはただの肉体ではなく、「家族思いの心」でもある。

こうした「心」が、漢人の金目当てのために、二度と盗まれないように、最初から「心」だけを残す火葬を選ぶ人が増えるだろう。灰にして、モンゴルの地に埋めれば、永遠に自分の故郷にとどまることができる。

#### 注

1) 冥婚の類型はいくつかあるが、本稿では死者と死者の結婚に限る。

#### 参考文献

Asia: Wet goods and dry goods; China's corpse brides  
The Economist. London: Jul 28, 2007. Vol. 384, Iss. 8539; pg. 64

廣田律子 1992「文献に見せる冥婚習俗とその意味」『人文研究』No. 114 神奈川大学人文学会

——— 1999「民間説話と儀礼—中国の冥婚譚と死霊結婚から」『国文学 解釈と教材の研究』Vol. 44 第14

中田睦子 1979「冥婚から陰陽合婚へ—台湾における冥婚類型の変化とその意味」

[コメント1. 桜井徳太郎]

[コメント2. 和田正平]『季刊人類学』10-3 講談社

アクセス時間 2007年9月23日

视频-我你看-山西冥婚骇人听闻杀人卖尸(1)(2)(3)

<http://www.50kan.cn/videolist/play/966650>

<http://www.50kan.cn/videolist/play/966649>

<http://www.50kan.cn/videolist/play/966665>

楊海英 2003「漢族がまつるモンゴルの聖地」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』風響社